

4—35

1 (表紙) 「破損」

2 「破損」

一 台徳院様御代元和四年五月十六日松平  
新太郎様江以

御奉書竹嶋渡海之儀私共先祖之者江

被為

仰付候、右

御奉書之写如左

■ 伯耆国米子竹嶋江

■ 十舟相渡之由候

■ ■ 如其今度致渡海

度之段米子町人村川  
市兵衛大谷甚吉申上  
付而達

上聞候之處不可有異儀之  
旨被仰出候間被得  
其意渡海之儀可被  
仰付候、恐惶謹言

5

永井信濃守

在判

五月十六日

井上主計頭

在判

土井大炊頭

在判

6

酒井雅樂頭

在判

■平新太郎殿  
(松方)

人々中

右之通御座候

一 台徳院様以来

御目見被為

仰付候節於

御城御役人様方より為心得被遊御渡候

御礼之次第書先祖之者より毎度之

御書付所持仕候処享保三年戌十二月廿七日之

夜出火之節居宅類焼仕候砌先祖より之

書付帳面等焼失仕候、尤焼残リ候

次第書之写如左

8 五月廿八日

如例月御礼相済

参勤之御礼

綿式百把金馬代

松平肥前守

綿百把金馬代

松平主殿頭

蠟燭二箱金馬代

松平筑後守

一 上枕彈正大弼在着ニ付而

以使者蠟燭五箱二種一荷

9 被差上之使者銀馬代を以

自分之御礼色部又四郎

終而御次之間伺公之面々并

落縁三面

伯耆国米子町人參上

大屋九右衛門

箱看

右終而入御

■ 通御座候

10

台徳院様以来

御代々様江

御目見之節竹嶋砲壺箱献上仕候、尤  
献上之御残御老中様方御側御用人様方  
若御年寄様方寺社御奉行様方江茂

奉差上候ニ付

台徳院様御代御側御用人松平右衛門太夫様より  
御直書被成下候、ケ様之類數多御座候處

11

右書頤候通類焼之節焼失仕候相殘候  
写如左、尤堅御捻

ア

大屋九右衛門殿 松平右衛門太夫

官所

正綱

今朝者被相尋殊串砲

■五カ百入一箱預持參候、心

■付カ之通令祝着候、令他出

12

■不カ能面談候、猶期面候、恐々

謹言

八月十四日

正綱書印

右之通御座候

一 常憲院様御代寺社御奉行秋元摶津守様より  
御使を以御口上書被成下候写如左

13

口上之覚

今度当御地江被相越候付

昨日者御入来殊竹嶋

丸千砲一箱預持參怡悅之  
至候、為其如斯候、以上

イ

小 口

秋元摂津守

五月廿日

使

常憲院様御代元禄七歳乍恐

14

御目見之年番<sup>ニ</sup>御座候間當御地<sup>江</sup>相詰  
則三月廿八日參上之為御礼

御目見被為

仰付難有仕合奉存上候、且元禄五年六歲

竹嶋<sup>江</sup>渡海仕候得共唐人罷在候付所務

不仕帰帆仕候間例格之通

獻上可仕鮑無御座、依之干鯛一箱

獻上仕候、尤御役人様方<sup>江茂</sup>箱看差上

15

申候、其刻為御挨拶以御使御口上書被成下候

數通右書顯之通類燒<sup>之</sup>節燒失仕候

相殘候写如左

口上之覺

昨日<sup>者</sup>干鯛一箱

預持參候、令祝着候

<sup>(爲力)</sup>其如斯候、以上

16

秋元但馬守

三月廿九日

使

昨日<sup>者</sup>干鯛一箱

■参令祝着候

為其以使申候、以上

加藤佐渡守

三月廿九日

使

右之通御座候

竹嶋<sup>江</sup>渡海仕候道法之内、隱岐國嶋後

17

一

福浦より七八拾里程渡り候而松嶋と申小嶋  
御座候付此小嶋江茂渡海仕度旨

台徳院様御代御願申上候處願之通被為  
仰付竹嶋同格ニ歳々渡海仕候、尤毎度  
奉差上候竹嶋渡海之絵図ニ書頭候御事

台徳院様以来

御巡見被為成御通候節伯耆国米子  
御止宿之砌村川市兵衛大谷九右衛門被

18

召出竹嶋渡海之儀、尤

台徳院様以来私共先祖より

御目見被為

仰付候次第被成御尋候付委細言上、則  
書付奉差上候御事

19  
一大猷院様御代寛永十五年

西之御丸御書院床之板御書棚之板

御用ニ付竹嶋梅檀可差上旨被為

19

仰付候、則奉指上候砌村川市兵衛大谷  
九右衛門當御地江相詰罷在候御事

一 寛文六年午歳竹嶋江渡海之年番大谷

九右衛門仕立之舟船數之内壹艘廿壹人乘  
帰帆之節朝鮮江被吹流舟ハ破損

仕候得共人數八舟頭水主共無別條陸江

上り候節朝鮮人出合介抱仕所之役所より  
吟味有之其上逗留中馳走日本江

20

帰帆之節国王より舟頭水主江音物目録等之  
次第其砌對州之役人中江舟頭水主委細  
書付出候控ハ之写如左

伯耆国漂流人口書之覺

一 伯耆国米子与申所之村川市兵衛大谷甚吉  
仕出之拾三端帆之船二艘人數五拾人乘

当年午ノ二月三日本國出舟、同十三日隱岐國江  
着船、四月六日彼所出帆、同八日竹嶋へ着舟仕候事

21

一 船主村川市兵衛大谷甚吉儀御朱印

頂戴仕居、毎年竹嶋<sub>江</sub>舟差渡相調之物者

ミチの魚之皮同油串鮑<sub>二而</sub>御座候、則御

朱印之写所持仕罷在候事

一 国本よりハ右二艘之船<sub>二而</sub>竹嶋へ渡り於此所  
拾五端帆之舟壹艘作り我々廿老人ハ、則  
十五端帆<sub>二</sub>乘三艘<sub>二而</sub>七月三日彼嶋帰帆之節  
遭難風<sub>二</sub>艘之儀<sub>者</sub>何国<sub>江</sub>漂着仕候<sub>茂</sub>

22

不存候拙者共乗船ハ洋中<sub>ニ</sub>二夜漂罷在

同五日之夜四ツ時分<sub>ニ</sub>朝鮮國之内ちやんきり

灘<sub>与</sub>申所<sub>ヘ</sub>致漂着、於浦口舟破損仕

夜ル之八ツ時分陸<sub>江</sub>游上り居申候處朝鮮人

出合我々令手引ちやんきり<sub>ヘ</sub>列參宿壹軒<sub>ニ</sub>

二三人宛召置候<sub>而</sub>粥を振廻申候、此所五日

逗留仕候家數廿軒程相見江申候、其内<sub>ニ</sub>地頭

被罷越切麦酒肴等振廻被申候、其後ちやんきりの

23

城下<sub>江</sub>被引越五日逗留仕候、其間兩度酒肴振廻被申候事

一 七月十四日ちやんきりを罷立、道中せそんと

申所之地頭より酒肴振廻被申候事

一 うるさんと申所<sub>江</sub>三日逗留仕候、此外道中<sub>ニ</sub>

泊り申候得共所之名覺不申候

同廿一日とくねき<sub>江</sub>參着仕候、其日菓子酒肴振廻被申候、其外逗留中三度酒肴振廻

24

御座候、此所<sub>ニ</sub>逗留七月廿一日より拾月三日迄罷在候

同四日とくねきよりさすとふと申所<sub>ヘ</sub>罷越候

此時<sub>茂</sub>とくねき地頭より酒肴菓子振廻被申候事

一 七月六日より十月四日迄ハ朝鮮國より扶持方塩噛薪等迄給候御馳走<sub>二而</sub>御座候事

一 拾月四日さすとふへ罷越候刻朝鮮<sub>江</sub>被差置候

役人中出合我々生土并宗門手形諸道具等之

儀迄念頃<sub>ニ</sub>改有之、其所より舟<sub>ニ</sub>乗侍中付キ

25

十月七日對州之内わにの浦と申所へ着船致

昨九日<sup>ニ</sup>爰元江罷着申候事

人数廿壱人宗門并歳付

上乗

一 浄土宗 旦那寺 伯耆国 大連寺 歳三十五 二郎兵衛

舟頭

一 禅宗 旦那寺 同国 安国寺 同三十六 太郎右衛門

鉄砲打

一 禅宗 旦那寺 同国 福巖院 同四十 久兵衛

同役

一 同宗 旦那寺 同国 西福寺 同廿五 又右衛門

かぢ

一 浄土宗 旦那寺 同国 大連寺 同四十一 与三右衛門

あわひつき

一 同宗 旦那寺 隠岐国 浄土寺 同三十七 太郎右衛門

同役

一 同宗 旦那寺 同国 同寺 同三十六 小作

同役

一 同宗 旦那寺 同国 同寺 同三十二 五郎作

同役

一 真宗 旦那寺 伯耆国 万福寺 同三十八 長兵衛

舟大工

一 禅宗 旦那寺 同国 同寺 同廿九 傳助 槍取 桶大工

一 同宗 旦那寺 同国 安国寺 同廿二 久右衛門

一 真宗 旦那寺 同国 万福寺 同三十九 作兵衛 水夫

一 法花宗 旦那寺 同国 本教寺 同廿二 十兵衛 同

27  
一 禅宗 旦那寺 隠岐国 万泉寺 同廿九 作助 同

一 同宗 旦那寺 同国 同五十四 次郎左衛門

一 真宗 旦那寺 同国 同三十二 角助 同

一 同宗 旦那寺 同国 同四十四 萬七 同

一 禅宗 旦那寺 同国 法增寺 同廿七 治兵衛

一 真宗 旦那寺 伯耆国 万福寺 同廿七 同

一 同宗 旦那寺 同国 同三十二 角助 同

一 禅宗 旦那寺 隱岐国 万泉寺 同四十四 萬七 同

一 同宗 旦那寺 同国 同四十九 九郎助 同

一 同宗 旦那寺 同国 同三十 彦八 同

一 净土宗 旦那寺 同国 净土寺 同四十 五助 同

一 同宗 旦那寺 同国 同三十九 九郎助 同

一 同宗 旦那寺 同国 同三十 彦八 同

28  
右我々宗門寺請之儀本国出舟之刻大谷甚吉

手前<sup>ニ</sup>留置宗門寺請を別紙<sup>ニ</sup>相認舟奉行へ遣、往来

切手出シ申候を請取出帆致候、然所船破損致候

刻右之往来切手箱共<sup>ニ</sup>捨リ申候故所持不仕候

尤船<sup>ニ</sup>積候荷物舟道具之儀破損之刻

捨リ申候を朝鮮人被入念取揚給候品々

改御座候、以上

29

十月十日

右之趣舟頭次郎兵衛公儀江申上覺書如件

明ル未ノ

寛文七年

二月廿九日

右之表未ノ一月廿九日書之写

右<sup>ニ</sup>書頭候通朝鮮國逗留中從國王  
舟頭水主江貼別之目錄式通如左

30

漂倭處別贈

頭倭一人

白米貳斗

堅紙  
薄様之厚  
樣成紙

從倭二十一名

白米各壹斗

朱印

丙午九月日

巡察使（花押）

漂倭二十二人

白米拾肆石拾斗

右同断

大口魚壹百拾尾

清酒貳拾貳瓶

東菰貳拾貳塊

生鮮貳拾貳束

甘醬陸斗陸升

際

丙午十月日

右同断

32

右之通御座候

一 天和四甲子二月

權現様以来之御勘状亦者御褒美之

御書有之候者早々相断可申旨

御触之趣從松平伯耆守様被仰渡、依之指上  
申候書付之写如左

3 3

覚

一 私共竹嶋江渡海仕候儀者松平新太郎様

因幡伯耆御領知被成候節元和三年伯耆國江

御仕置之為

御使阿部四郎五郎様御越被成候ニ付私共親

御訴詔申上、翌年御江戸江相詰御詮議之上

新太郎様江

御奉書被遣之從新太郎様其

3 4

御奉書私親共頂戴仕難有代々所持仕候、夫より  
隔歳兩人ニ而渡海仕候、就夫八九年之内老人宛

罷越

御代々様

御目見被為

仰付候、延宝九年酉七月當

御代様江茂村川市兵衛

御目見申上候、以上

3 5

天和四年

子ノ二月廿日 村川市兵衛

大谷九右衛門

右之通御座候

一 元禄五年壬申歲如例年竹嶋江渡海仕候處

唐人罷在依之帰帆仕候、夫より六年七年八年迄  
御差図を以渡海仕候処、年々唐人相増罷在候付  
所務不仕帰帆之節其次第委細御届ケ申上候

3 6

然処元ママ錄九丙子年正月廿八日以

御奉書竹嶋渡海制禁之旨松平伯耆守様迄  
被為

仰出則從伯耆守様右之趣被為仰渡候、尤

御奉書之写如左

先年松平新太郎

因州伯州領知之節

37

相伺候ハ、伯州米子之

町人村川市兵衛大谷

甚吉竹嶋江渡海

至于今雖致漁候

向後竹嶋江渡海之

儀制禁可申付旨

被仰付候間可被存

其趣候、恐惶謹言

38

土屋相模守

在判

正月廿八日

戸田山城守

在判

阿部豊後守

在判

大久保加賀守

在判

39

松平伯耆守殿

右之通御座候

一 竹嶋渡海制禁被為

仰付候付家業を失渡世可仕様無御座、依之村川

市兵衛儀元ママ録 十丑年より午年迄前後六ヶ年

40

相詰御歎キ之御訴詔申上候御事

一 享保九甲辰年竹嶋渡海之儀被為遊

御尋候旨從松平相模守様御書付を以被為

仰渡候趣如左

江戸御尋書之写

一 先年竹嶋江伯耆國より相渡候者唐人出合追拵候  
其節唐人何人程嶋ニ居有之候哉、弓鉄砲等

持居申候哉、年号月日共委細書付可差上事  
其以後又罷越候處其節も唐人出合追拵候、其

節者唐人兩人召捕罷越候、其節之首尾并  
年号月日相調可差上事

一 右之嶋ニ有之候品々委細書付可差上事  
竹嶋東西広サ大概之絵図仕可差上事

一 右嶋ニみち有之候哉、其外獸類有之由相聞候  
此段委細書付可差上事

一 右嶋ニ竹木者如何様成もの有之候哉、書附  
可指上事

一 唐人相渡り候時節与伯耆國より相渡候時節違候様  
相聞候、此段も可申上事

一 伯耆之浦より竹嶋迄渡海之数里如何程有之候哉  
竹嶋より朝鮮江者如何程可有之候哉、此段書付  
可差上事

（朱書き）「第御七ヶ條御尋御座候」  
右之通御座候  
一 右本文ニ書蹟候通竹嶋絵図  
左之通御座候、尤有増書込候  
絵図ニ而御座候、委細之儀者別ニ

大絵図所持仕罷在候猶以委  
御尋茂御座候者右之大絵図  
尤口上ニ而可申上候

竹嶋有增之絵図如左

(絵図①から⑩)

① 雲州三保関

② 雲州雲津

③ 雲津ヨリ千振十八り

④ 隠州中嶋

⑤ 中嶋より福浦へ八里

⑥ 隠州焼火山

⑦ 隠岐嶺前三嶋

⑧ 隠州千振

⑨ 隠州嶺後

⑩ 東

⑪ 福浦

⑫ 是ヨリ松嶋へ七十里計

⑬ 松嶋

⑭ 此間四拾間計

⑮ 松嶋

⑯ 是ヨリ濱田浦四拾里計

⑰ 古大坂浦

いか嶋

⑲ 大坂浦

まの嶋

まの嶋

⑳ 北浦

柳浦

㉑ 北国浦

竹か浦

㉒ 濱田浦入津所

㉓ 竹嶋

㉔ 唐船かはな

㉕ 竹嶋大廻り拾里計

右御請書并絵図之外ニ壳通奉差上候

書付之写如左、是者相模守様御尋之事

乍恐口上之覚

一  
三拾三年より三拾壹年跡迄竹嶋江渡海之舟頭  
水主存命ニ而居不申候、雲州并隱岐國より過半  
召抱申候、右之所之者存命ニ而罷在候哉、此段  
不奉存候

一 三拾三年已前竹嶋へ渡海仕、只今相残り居申候者  
47

五人御座候、内式人者廻船二而罷出宿ニ居  
不申候、残三人之内式人者八十余ニ罷成申候  
此度召連申候者七十式才ニ罷成申候

此度召連候弥三兵衛と申水主ハ三拾三年より

以前渡海仕候者二而御座候

一 唐人竹嶋江参居申候節自分小屋拵

申候哉と被成

御尋候、自分拵申候様子二者相見へ不申候

48

毎年此方より拵候小屋ニ居申候由水主共申候  
一 三拾三年以前竹嶋二而唐人見申候哉と被為遊  
御尋候、元和年中以後唐人見不申候由  
其節申上候

一 私共二元祖何代竹嶋へ渡海仕候哉と被遊

御尋候、村川市兵衛儀三代以前より渡海仕名  
三代共ニ市兵衛と申候

一 大谷九右衛門儀唯今迄四代竹嶋渡海

49

御免之節者甚吉と申候、後三代ヲ九右衛門と申候  
一 竹嶋渡海被為遊  
御免候年号

御目見仕候年号并其節被為遊御執持候

御旗本衆御名之儀被為遊

御尋候、私共竹嶋渡海之儀者松平新太郎様

因幡伯耆御領知之時分元和三年伯耆国

御仕置之為

50

御使阿部四郎五郎様被成御越候時分、私共先祖

御訴詔申上、翌年江戸表江相詰御詮議之上

新太郎様江

御奉書被遣、則其

御奉書從新太郎様私共先祖頂戴仕、夫より

隔年ニ兩人二而渡海仕候、就夫八九年之内壱人宛  
罷越

御代々様

5 1

御目見被為  
仰付候、始而

御目見申上候年号相知不申候

一 御紋之風見之儀代々所持仕候

御免之由諸年号之儀私共控無御座候

一 元錄(マメ)十一寅年八月村川市兵衛儀江戸江寵越

殿様御威光を以竹嶋渡海之儀御願申上候  
得共嶋之儀者相調不申候由ニ付大勢水主共

5 2

難儀仕候故存寄之儀共御願申上候得共  
勝手必死と続不申候付元禄十六末年三月

御屋鋪江申上寵帰申候、以上

享保九甲辰年閏四月三日

大谷九右衛門

右之通御座候

5 3 一 御尋ニ付右御請書付両通并絵図差添

奉指上候処再応之

御尋之趣如左

一 米子より出雲国雲津浦出舟之所迄海地

陸地何程有之候哉、但海上迄致往来候哉

一 元禄五壬申年朝鮮人ニ出合候節米子より

渡海之船頭水主其外人數何程并舟

何艘ニ而寵越候哉

一 翌六年癸酉年寵越候節、舟數并人數

何程ニ而致乗船候哉

一 渡海之節前々弓鉄砲致用意寵越候哉

同七甲戌年同八乙亥年兩年寵越候節  
人數舟數茂同前ニ而有之候哉

一 朝鮮人ニ出合候翌酉年寵越候節、竹嶋  
朝鮮人大概何十人程有之候哉

5 4

何程ニ而致乗船候哉

一 渡海之節前々弓鉄砲致用意寵越候哉

人數舟數茂同前ニ而有之候哉

一 朝鮮人ニ出合候翌酉年寵越候節、竹嶋  
朝鮮人大概何十人程有之候哉

右之通再応之

御尋<sub>ニ</sub>付御請書奉差上候趣如左

5 5

乍恐口上之覚

一 伯耆国米子より雲州雲津浦迄之道法米子より  
濱ノ目境村迄陸四里半出雲国宇井浦江  
五丁計之舟渡り御座候、夫より同国三保之関江  
式里三保之関より雲津江者陸路壹里都合

七里半五丁

一 米子より雲津迄舟路九里

一 元禄五壬申年村川市兵衛大谷九右衛門竹嶋江

相渡申候、舟式百石計積申候、舟壹艘遣シ申候  
舟頭水主式拾壹人鳥銃五挺遣シ申候、尤  
其節居申候唐人三拾人計見及申候

一 元錄<sub>(ママ)</sub>六癸酉年之渡海舟壹艘舟頭水主

式拾壹人鳥銃五挺持參仕候、其節之唐人之  
數大勢と計控書<sub>ニ</sub>御座候、前々舟式艘遣シ候  
節者鳥銃八九挺<sub>茂</sub>遣シ申候、弓ハ遣シ候儀者  
無御座候

5 7

一 戊亥兩年渡海仕候節舟頭水主船數

一 鉄砲數同前<sub>ニ</sub>遣シ申候

一 竹嶋<sub>ニ</sub>居申候朝鮮人壹年々増亥年<sub>打</sub><sub>者</sub>  
所々<sub>ニ</sub>五拾人三拾人程宛大勢罷在候由<sub>ニ</sub>御座候  
以上

伯州米子町人

大谷九右衛門

享保九年辰五月十日

伯州米子町人

村川市兵衛

5 8

右之通御座候

一 再応之

御尋<sub>ニ</sub>付右御請書壹通奉差上候、以後

重而

御尋之趣如左

一 竹嶋江致渡海候舟頭水主存命二而罷在  
米子ニ住宅之者共ニ候哉

右之通

御尋ニ付御請書奉差上候趣如左

乍恐口上之覺

一 灘町弥三兵衛と申者七十式才ニ罷成申候

四拾年以前ニ竹嶋江一度渡海仕候、此度鳥取  
召連參候者ニ御座候

一同町長右衛門と申者五十三才ニ罷成申候、私共  
鳥取江參候時分ハ舟ニ罷出、近頃罷戻り

申候付様子相尋申候得者、元録(ママ)四年より同六年迄

60 三年之間渡海仕候様ニ申候、私共儀右之者

十九か廿計ニ而一度渡海仕候様覚申候故

右之通申上候処、此度直ニ相尋候得者唐人渡海  
之節兩年共参申候由申候

一 片原町長兵衛と申者六十三才ニ罷成申候

此者前々四月中旬舟ニ罷出未罷帰不申候故  
委細相知不申候

立町源右衛門と申者八十四才ニ罷成申候、三拾

七年以前四度渡海仕候由申候

一 灘町吉兵衛と申者七十九才ニ罷成申候、四拾三年

以前迄十度渡海仕候由申候、右兩人者極老

行歩不叶候故右鳥取江召連不申候

右之通御座候

片原町太兵衛と申者七十式才ニ罷成申候  
四拾四年以前兩度渡海仕候由申候

一 立町惣兵衛と申者七十五才ニ罷成申候、四拾

六年以前ニ兩度渡海仕候由申候、右兩人之

60

61

62

59

儀者私共急ニ鳥取ヘ罷越申ニ付相知不申候処

此度御詮議之上<sub>三而</sub>申出候間書付差上申候、以上

村川市兵衛

享保九年辰六月廿三日

大谷九右衛門

右之通御座候

6 3

右之通御座候、依之御請書奉差上候  
写如左

第御一箇條之御請

元禄五壬申年二月十一日米子より出舟、隱岐国嶋後福浦<sub>江</sub>着岸、三月四日福浦より出舟、同廿六日朝五つ時竹嶋之内いか嶋と申所<sub>江</sub>着舟ノ様子見申候得者鮑大分取上ヶ申様相見ヘ不審<sub>ニ</sub>奉存同廿七日朝濱田浦へ参申内唐舟式艘相見ヘ申候内壹艘<sub>者</sub>

6 4

すヘ舟壹艘ハ浮舟<sub>ニ而</sub>居申候、唐人三拾人計見ヘ申候右之浮舟乗り此方之船より八九間程沖を通り大坂浦と申所<sub>ニ</sub>廻り申候、右之内兩人陸<sub>ニ</sub>残り居申候處<sub>ニ</sub>又小船<sub>ニ</sub>乗り参申候故此方之船<sub>ニ</sub>乗せ申候<sub>而</sub>何国之者と相尋候得ハ壹人ハ通辞<sub>ニ而</sub>ちやうせん國かわてんかわくの者と申候故此嶋之儀者元來日本之地<sub>ニ而</sub>從

6 5

御公方様代々拝領仕、毎年渡海いたし候嶋<sub>ニ而</sub>候處<sub>ニ</sub>何とて其方共参候哉と相尋候得者此嶋より北<sub>ニ</sub>当り嶋有之三年ニ壹度宛國主之用<sub>ニ而</sub>鮑取<sub>ニ</sub>参候、国本ハ二月廿一日類舟拾壹艘<sub>ニ而</sub>致出船難風<sub>ニ</sub>逢五艘<sub>ニ而</sub>已上五拾三人乗此嶋へ三月廿三日流着此嶋之様子見申候得ハ鮑有之候間致逗留鮑取上ヶ候由申候左候ヘハ、此嶋を早々罷立候様<sub>ニ</sub>と申候得者舟少損候間造作仕調次第三出舟可仕候間其許之御舟是ヘ御すヘ可

6 6

被成と申候得共此方共舟をハすヘ不申先人計

以上

陸へ上り見分仕候処、兼而此方より拵置候諸道具、獮舟八艘見へ不申ニ付通士江段々吟味仕候得ハ浦々へ廻し遣候由申候、先此方之舟すヘ申様ニと申候へ共唐人ハ大勢此方者纔廿一人ニ而御座候付無心許奉存竹鳴より三月廿七日之七ツ時出舟仕申候、然共何にても印無御座候而ハ如何と奉存、唐人之拵置候

6  
7

串鮑少笠壱ツ網頭巾壱ツ味噌かうし

壱玉取致出船四月朔日ニ石州濱田浦へ着船仕

夫より四角雲州雲津浦迄参、翌五日之七ツ時

四日  
米子江入津仕候、右之趣元録 五壬申年四月

六日竹嶋渡海之舟頭水主共口上申候、右唐人弓鉄砲所持仕不候哉と被為遊

御尋候、其節吟味仕候処惣而武具之類所持不仕候

6  
8

#### 第一御二箇條之御請

一  
元禄六癸酉年二月下旬米子出船、雲州雲津江着岸、三月初頃雲津より出船、隱岐国嶋後福浦へ着到、四月十六日四ツ時福浦を出舟、同十七日八時ニ竹嶋へ参着仕候処唐人大分居申候付陸江

上り段々吟味仕候處不埒之申様付、頭と相見申候者壱人下方之者壱人已上兩人召連竹嶋を同十八日八ツ時出船仕、同廿七日ニ罷戻り申候而

6  
9

早速鳥取江御注進申上候処、江戸被為遊御窺右兩人を長崎江被遣候、其後戊亥兩年渡海仕候得共唐人大勢居申ニ付所務不仕帰帆仕候

#### 第二御三箇條之御請

一  
竹嶋ニ有之品々委細書付差上候様被為仰出候付古來渡海之舟頭水主共へ相尋候処見知候物迄品々書留置候付、此度左之通

## 書付差上申候

## 木竹之類

- 一 五葉之松 一 梅檀木之色黒赤寅亥く二御座  
ちなしの白きもの候  
一 きわだ 一 椿  
一 槐  
一 枝葉もみぢのことく  
木の色あかし  
一 竹  
一 桐  
一 まの竹  
一 かび

## 草之類

- 一 にんしん 一 にんにく 一 ふき  
一 めうが 一 うど 一 ゆり  
一 こほう 一 あをきは 一 ぐみ  
一 いちご 一 いたどり

一 辰砂岩ろくしやうのやうの物御座候得共獵迄ヲ

心懸申ニ付此段ハ疎と知不申候

一 彼地ニ大河三筋御座候、水主共右川ニ而手水

遣申候節山風ニ何方共なく宜香仕候、その外ニも

72

珍敷物茂可有御座奉存候得共深山ニ而山之

内ヘ者フかく参かたき由申候

## 第御四箇條之御請

- 一 竹嶋東西広サ之儀竹木重り相知不申候由并  
嶋廻り者凡拾里余茂可有御座候哉と水主共申候  
絵図之儀者別紙ニ仕差上申候

## 第御五箇條之御請

- 一 竹嶋ニみち魚之外獸類有之哉と

73

御尋被為遊候、左之通書付差上申候

## 鳥獸之類

- 一 みち魚 一 ねこ 一 鼠  
一 城雀 一 雀 一 あな鳥  
一 鳩 一 ひよ鳥 一 かわらひわ  
一 四十雀 一 かもめ  
一 なぢこ 一 つはめ  
一 くまたか 一 鷺

## 第六箇條之御請

一 唐人相渡候時節と伯耆国より相渡候時節と  
違候哉と被為遊

御尋候、古來此方より者一三月ニ渡海七月上旬帰帆  
仕候、年々渡海之節吟味仕見申候處此方より彼嶋  
小屋之内開置候諸道具獵舟等少も取敷候様子  
相見江不申候間唐人共前々渡海仕候儀ハ無御座と奉存候  
但元禄五壬申歲三月ニ唐人初而渡海仕候様ニ

75

奉存候、然共唐人渡海之時節者不奉存候

## 第御七箇條之御請

一 伯耆国より竹嶋迄渡海之數里并竹嶋より朝鮮江  
渡海之數里被為遊

御尋候、米子より竹嶋江者百四五拾里竹嶋より朝鮮江者  
四拾里程可有御座候様ニ水主共申候、濱目三ツ柳  
村より隱岐國嶋後江三拾五六里御座候、竹嶋より朝鮮  
山を見渡候處ニ少遠ク相見江候故四拾里程と

76

申上候

右之通此度被為遊

御尋候付、古來書留置候趣相殘候水主共ヘ相尋  
書付差上申候、以上

伯州米子町人

大谷九右衛門

享保九丙辰年閏四月三日

村川市兵衛

77

右者元和二丁巳年より元禄九丙子年迄八拾

式年之間有增如斯御座候、尤竹嶋渡海制禁ニ

被為

仰付候節、元禄九年より享保九年甲辰年迄  
式拾九年以後再三之

御尋ニ付御請書并繪図等則相模守様迄

奉差上候、且元和三年以来より當時元文三年迄

都合百式拾式年成申候、以上

7  
8

元文三戌午年十二月

8  
0 7  
9 (白紙)